

喝采の記憶が残るまち

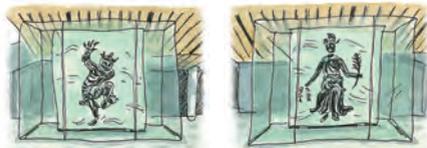
——東京・明治神宮外苑

全国各地を歩いていると、日本の近代史を土地の記憶にとどめる場所と出合うことが時折あります。

陸上、野球、サッカー、ラグビーなどの熱戦が繰り広げられてきた「明治神宮外苑」は、さしずめ近代スポーツの記憶が積み重なった聖地でしょう。その中心が、昭和39年の東京オリンピック会場だった旧国立競技場。ただし前身があります。大正末期竣工の明治神宮競技場がそれ。こけら落としの競技大会は、後の国民体育大会へと継承されました。紆余曲折がありながら今年竣工した新国立競技場は、大正と昭和を経てつごう三代目のスタジアムというわけです。

ちなみに外苑一帯は、その昔青山練兵場跡地でした。太平洋戦争末期、出陣学徒壮行会が雨中行なわれたのもこの場所です。昭和初年の地図を開いてみると、周辺には陸軍大学校や近衛歩兵連隊なども記されており、かつてはスポーツならぬ軍のまちであったことに気付かされます。

1年延期となった東京五輪ですが、来夏、平和な喝采の記憶がもう一つ、神宮の杜に刻まれることを期待したいものです。



旧国立競技場から移設された力と美を象徴するモザイク壁画。
野見宿禰(のみのすくね)像(左)とギリシャの女神像(右)



「むがすむがす、あつたずもな」

—— 岩手・遠野市

『遠野物語』はご存じですよ。 明治43年（1910）、民俗学者の柳田國男が遠野の出身者、佐々木喜善から聞いた、ちよつと不思議な民話の数々を集めた本です。

遠野は、岩手県東部の北上山地に囲まれた盆地のまち。盛岡、花巻、陸前高田、釜石、宮古など、県下の主立った都市のちようど中間に位置します。そのため、山深い里でありながらヒト・モノ・カネの流通がきわめて盛んで、藩政時代には盛岡に次ぐ規模の城下町でした。

そんな地理的条件が、周辺各地の出来事やうわさ話をもとに民話を多く生んだといえます。「むがすむがす、あつたずもな」（昔々、あつたかもしれない話なんだけどね）と、地元の語り部ボランティアたちが語り始める民話は、市内の観光施設などで今でも聞くことができます。

もう一つ遠野で知られるのは南部曲がり家。母屋と厩がし字につながり、人馬が一つ屋根の下で暮らす民家建築は、奈良時代からの歴史を有するという南部馬の産地ならではの。

中でもスケッチした千葉家は規模が大きく、見応え十分。曲がり家の大半は時とともに消えてしまいましたが、こんな貴重な風景は、民話と同様にいつまでも残しておきたいものです。



※「南部曲がり家 千葉家」は2020年8月現在、大規模修繕中です。



茅葺きの南部曲がり家7棟が移築された「遠野ふるさと村」にある水車小屋

